学位研究　第11号　平成11年12月（論文）
［学位授与機構研究紀要］

アメリカにおける学外学位授与機関（その３）
―チャーターオーク州立大学の卒業生・中退者の意識と動態―

External Academic Degree Program in the United States（III）:
Graduates and Withdrawing Students of Charter Oak State College

橋本　鉱市
Koichi HASHIMOTO

Research in Academic Degrees, No. 11（December, 1999）［the article］
The Journal of National Institution for Academic Degrees

1．はじめに …… 93

2．COSC卒業生に関するアンケート調査 …… 93

（1）調査の概要 …… 93

（2）調査分析結果 …… 95

（a）学部経験 …… 95

（b）卒業後の継続教育 …… 97

（c）雇用（転・就職） …… 98

3．COSC中退者に関するアンケート調査 …… 99

（1）調査の概要 …… 99

（2）調査分析結果 …… 100

（a）「教育的な経験」 …… 100

（b）中退理由とその後の計画 …… 101

4．おわりに …… 102

ABSTRACT …… 105

アメリカにおける学外学位授与機関（その３）
―チャーターオーク州立大学の卒業生・中退者の意識と動態―

橋本　鉱市*

1. はじめに

本稿は，米国における学外学位授与機関の一つであるチャーターオーク州立大学（Charter Oak State College，以下COSCと略記）の卒業生（学位取得者）と中退者に関する同大のアンケート調査をもとに，学外学位制度の利用者のプロフィールや学位取得に対する意識を分析し，またこうした授与機関に対する評価や課題についても考察することを目的としている。

さて，同大学は，リージェント大学，トーマス・エジソン大学と並んで，アカデミック・レジデンシー（academic residency）を学生に課さない，すなわちキャンパスでの教育機能を持たず，遠隔教育と大学の外で行われた学修の評価のみに基づいて学位（準学士・学士）を授与している米国コネチカット州の学外学位機関である。この意味で，わが国の学位授与機構の制度と相通じる部分が多い。

すでに，COSCの学外学位制度の概要，およびコネチカット州高等教育システムにおける同大の地位と役割に関しては本誌でもすでに考察したが[1]，本稿では，わが国の学位授与機構との比較を視野に入れつつ，COSCの卒業生（学士および準学士取得者）と中退者を対象とした同大のアンケート調査を利用して，彼らの入学動機，学位取得のインパクト，中退の理由，などクリティカルな調査結果について紹介し，同大の学位授与制度について，その課題と展望を考察する。具体的には，まずCOSCの卒業生に関するアンケート調査の概要とその調査結果を（第２章），また中退者に関する調査結果を紹介し（第3章），それらを通してみたCOSCの問題と可能性を整理する（おわりに）。

2. COSC卒業生に関するアンケート調査

（1）調査の概要

以下に紹介するのは，1996年に実施されたCOSCの卒業生に関する調査，“ Charter Oak State College: Report on Recent Graduates, Fall 1991 through Spring 1995 ” の分析結果であるが，対象者は，同大で1991年秋から1995年春までに学位を取得した合計1004名の卒業生であり，郵送留め置き法によって，628名から回答が得られている（回収率62.5％）。

---

* 学位授与機構審査研究部　助教授

このアンケート調査の目的は，最近のCOSC卒業生の在学中の教育経験と，その後の進路（進学および雇用（就・転職））に関する情報を収集することにあるとしているが，同時にCOSCの教育活動の評価の一部でもあり，学生の教育成果を測定して，COSCの「教育の質」の向上の戦略としても位置づけられるとしている。

具体的には，コネチカット州内のどのような人々がCOSCの学生として最適なのかを特定し，そしてそうした集団に対するマーケティング・キャンペーンを積極的に進め，成人の学習者に見合う革新的プログラムを先導的に開発するためだとしている。さらに，リベラルアーツに重点を置き高いアカデミック・スタンダードを維持しつつも，同大の学位プログラムを学生（生涯学習者）の学習ニーズに焦点を当てて革新的な技術などを取り入れ，卒業生が職場および生涯学習の場でも適切なスキル，知識，理解を保持できるようにすること，またそれに対応できるような知識が豊富な進歩的なスタッフ，教授陣，コンサルタントなどを確保するための基礎資料としたいとしている。COSCは，こうしたアンケート調査を通して，遠隔教育の学習環境においても学生との個人的つながりを維持することを目指しているようである。

この調査結果の報告書は，学部教育の経験，卒業後の継続教育，学位取得後の雇用（就・転職）の3パートに分かれているが，それらのなかからクリティカルな部分について，以下で摘出して紹介したい。

まず，学位取得者の社会的属性から見ておこう（表2－1～表2－6，参照）。これらの属性は，以下の分析の比較対照群として使用されている。性別としては，過半数が女性であり，既婚者が7割近くを占めている。エスニシティーは，ほとんどが白人である。年齢構成としては，40歳代が3分の1を占めるなど，COSCが社会人のための学習機関であることが明確に示されている。また，取得した学位レベル別にみると，学士取得者が4分の3を占めており，卒業生全体の在学期間としては，2年未満のものが6割，特に1年以上2年未満が4割近くという内訳になっている。

表2－1：性別	
男性	46.2
女性	53.8
合計（%）	100.0
実数	626

表2－2：結婚	
独身	33.2
既婚	66.8
合計（%）	100.0
実数	620

表2－3：エスニシティー	
黒人	2.6
アメリカ原住民	0.5
アジア・太平洋	1.0
ヒスパニック	1.6
白人	94.4
合計（%）	100.0
実数	624

表2－4：年齢構成	
20歳以下	0.2
21-24	1.0
25-29	9.4
30-34	16.7
35-39	23.3
40-49	34.4
50-59	12.6
60歳以上	2.4
合計（%）	100.0
実数	627

表2－5:取得学位	
準学士	22.8
学士	77.2
合計(%)	100
実数	628

表2－6:在学期間	
1年以下	22.2
1～2年	38.8
2～3年	18.6
3～4年	9.1
4～5年	5.1
5年以上	6.1
合計(%)	100.0
実数	623

(2) 調査分析結果

(a) 学部経験

最初のパートとして，なぜCOSCに入学したのか，また同大の教育方針とサービスに対する満足度はどうか，教育経験が個人の目標にいかに影響を与えたかを質問している。

・入学の理由

表2－7は，COSCへの入学理由をまとめたものだが，「すでに取得した単位の大部分が認められるため」(表中の項目名：「既習単位の認定」，以下同様）が半数を超える回答であり，次に「早く学位を取得できる機会の可能性があるため」(「短期間の学位取得可能」)，「コストが安いため」(「コスト」）と続いていることがわかる。

また，前項であげた社会的属性によって，その入学理由に有意な差が見られるかを検証しているが（$\chi 2$検定，$p<0.05$，以下同様)，それによれば，性別，配偶者の有無，エスニックグループによる差は認められていない。ただし，準学士取得者は学士取得者よりも，「単位履修方法の多様性」と「雇用主の推薦」を挙げる者が多い傾向にあること，一方で学士卒業生は，「高校の恩師の推薦」を示す傾向が高いことが認められるが，その他の項目では有意な差ではないこと，また，卒業年次を経るに従って，「入学要件」および「高校の恩師の推薦」を入学の理由として挙げる者が増加していること，などが判明しているとのことである。ただし，報告書ではそれらの差の解釈は判然としないものの，学士取得者と準学士取得者との間には，その学位取得の目的が若干異なるものと考えられる。

表2－7:入学の最も重要な理由(%)	
既修単位の認定	57.0
短期間の学位取得可能	13.5
コスト	13.0
専攻分野の多様性	5.6
単位履修方法の多様性	5.5
その他	1.6
高校の恩師の推薦	1.3
入学要件	1.1
友人・家族の推薦	0.6
雇用主の推薦	0.6
合計(%)	100.0
実数	621

・教育方針及びサービスに対する満足度

表2－8には，COSCの教育方針および教育サービスなどへの「満足度」に関する回答を，筆者がまとめたものであるが，「既習単位の認定数とレベル」，「単位履修方法」に，7割以上の卒業生が「非常に満足」と答えており，またほとんどの卒業生が「奨学金」以外の項目すべてで，「非常に満足」と「まあ満足」と回答していることがわかる。

実際に学位を取得した卒業生を対象としていることもあるが，「満足度」は非常に高い。とくに，「入学アドバイス」や，その対応，また入学後の単位履修方法などへの「アカデミック・アドバイス」にほとんどのものが満足と答えていることからすると，COSCのアドバイザリー機能が十全に果たされていることが示唆されているといえよう。また，ほとんど同数の者が，学業相談と学業相談の回答に大変満足または満足と答えているまた，「奨学金」（経済的な援助）に関しては，満足している者は7割程度で他の項目よりも低いが，回答者数も少なく，実際に奨学金を貸与されたか否かをコントロールして分析する必要があるが，その詳細は不明である。

また，前項の入学理由と同様に，社会的属性ごとに満足度に関して有意な差を検証しているが，それによれば，性別，配偶者の有無，エスニックグループ間では，有意な差はないか，あるいはサンプル数が少なすぎて比較に堪えられないものの，学士取得者は，準学位取得者に比べ，コスト，テスト業務について満足度が高いこと，またその他の項目では，有意な差が見られないか，あるいはサンプル数が少なすぎて，比較できないことが判明したとしている。この結果についても，報告書ではその原因については言及されていない。

表2－8：学位取得の満足度	コスト	奨学金	入学要件	一般教育の単位履修要件	単位履修方法	入学アドバイス	入学アドバイスの対応	アカデミック・アドバイス	アカデミック・アドバイスの対応	既習単位の認定数とレベル	テスト業務	専攻分野の単位履修要件	COSCのプログラム全体
非常に満足	54.1	45.5	55	53.4	72.4	55.7	57	61.2	64.4	72.6	53	58.4	69.9
まあ満足	36.2	27.3	42.7	43.5	24.8	36.8	34.9	26.7	25.1	21.8	41.2	38.4	27.9
あまり満足でない	8.8	12.5	2	2.8	2.4	4.9	5.4	10	7.9	4.4	5.2	2.8	1.9
不満足	1	14.8	0.3	0.4	0.3	2.7	2.7	2.2	2.6	1.2	0.5	0.4	0.3
合計（%）	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
実数	614	88	398	536	584	185	186	603	191	592	364	469	359

・学習経験のインパクト

次に，アンケートでは，卒業生にCOSCでの学習経験が，個人の目標達成のためにどれくらいのインパクトを与えたかを質問している。表2－9は，その結果である。

ほぼすべての卒業生が，学業経験が「学位取得」に大きなインパクトを与えたと回答しており，それに続いて，「個人学習」，「自己への自信」，「上級学位への準備」に対して大きなインパクトまたはなんらかのインパクトを与えたと答えたものが，8割程度を占めている。また，3/4が卒業生が，「時間管理」に大きいインパクトまたはなんらかのインパクトを与えたと答えている。さらに続いて，約2/3が，彼らの経験は様々な「試験受験」，「問題解決」にインパクトを与えたと答え，さらに約半数が，「ライティングスキル」，「読解力」，「数学・科学原理の理解」，「リーダーシップ」，「責任のある市民」となることに，インパクトがあったと答えている。「図書館の効率利用」と「芸術への造詣」には，あまりインパクトがなかったと回答しており，過半数のものが，ほとんどまたは全くインパクトがなかったと答えている。

これらの学位取得の効果についていえば，「学位取得」という質問項目は言わずもがなの感が

するが，自己への自信をつけたという者が9割近いことは興味深い。学生個人の学位取得の目的が手段的であり明確であるとはいえ，その学習経験が自己への自信の向上につながるという点は，その目的成就の達成感からくるものと考えられる。

また，これまでと同様に，社会的属性ごとに，その満足度に関して有意な差を検証しているが，それによれば，女性は男性よりも自分への自信，テスト受験，問題解決に役だったと答える傾向にあるが，その他の項目では性別による差は見られないこと，エスニックグループ間や学位取得別では，有意な差はないかあるいは比較できるほどのサンプル数がないこと，卒業時期ごとにはライティングスキルと読解力に対するインパクトがあったと報告する卒業生が年々増加しているが，その他の項目では有意な差は認められないことなどが分析されている。このライティングスキルと読解力に関しては，1992年以降，「英作文」の単位要件を3から6へと増やし，それが功を奏しているためだとしている。

表2－9：学位取得のインパクト	ライティングスキル向上	読解力	試験受験	図書館の効率利用	芸術への造詣	数学・科学原理の理解	個人学習	時間管理	問題解決	自己への自信	学位取得	上級学位への準備	リーダーシップ	責任ある市民
非常にあった	18.1	16	26	12.3	11.6	14.4	50.2	43.7	28	52.3	90.3	53.9	15.9	18.5
ある程度	38.7	39.2	40.1	28.7	28.9	35.8	29.3	32.4	37.9	31.6	7.9	31.7	35.5	32.7
あまりなかった	21.5	22.6	17.3	27.4	23.7	21.3	9.4	11.9	18.1	7.6	1.2	6.1	20.9	18.8
全くなかった	20.3	21.2	15.4	29.7	33.5	26.3	10	11.3	14.5	8	0.5	4.3	24.1	27.6
不明	1.4	1	1.2	1.9	2.3	2.2	1.1	0.7	1.5	0.5	0.2	3.9	3.6	2.4
合計(%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
実数	507	513	519	464	439	464	542	540	525	566	598	508	498	504

(b) 卒業後の継続教育

このパートでは，履修した専門科目，合格したライセンスまたは資格試験，他の学位プログラムへの入学，COSCで修得した単位のトランスファー，現在の専攻分野の準備度合に関する情報について質問している。

表2－10では，準学士および学士卒業生が入学した新たなプログラムをまとめた。なお，インテンシヴに，アカデミック・アドバイザーとコンタクト出来る卒業生からインタビューを行い，詳細な情報を得ている。

・準学士卒業生

準学士卒業生の60％が，その後も，「学士課程」「修士課程」などで学習を続けており，そのうち84％は，COSCで学士号取得のため勉強を続けているとのことである。

また，そのうちの8人の準学士卒業生から，COSCでの修得単位が他大学の学士プログラムに互換出来るかどうかについての情報を得ており，それによれば，そのうち83％が単位を互換でき，学士課程に入学した卒業生の75％が自分の専攻分野に十分または大変十分準備できていたと答えているとのことである。ただし，社会的属性によるサブグループ間の比較は，準学士取得者ではサンプル数が少なすぎるため，不可能であったとのことである。

・学士号卒業生

56人の学士卒業生は，COSCでの専攻に関連したライセンスまたは資格試験を取得し，またそれらの試験のスコアを受け取った51人のうち，94％が試験に合格していたとのことである。

表2－11に，COSCで学位を取得した専攻分野を，また表2－12に卒業後に進学した上級学位プログラムでの専攻分野を示した（それぞれ上位グループのみ）。両者のクロス分析がないため明確なことは指摘できないが，学士号卒業生のうち43％が新しいプログラムに入学したとのことである。また，修士号，博士号および専門職学位プログラムに入学した者のうち，90％が入学条件として，追加単位を取得する必要がなく，84％が新しいプログラムの勉強のために十分または大変十分準備ができていたとのことである。

表2－10:学位取得後の進学先

準学士		学士	
学士課程	47.6	修士課程	51.8
進学先無し	33.3	進学先無し	31.5
資格証書	9.5	プロフェッショナルスクール	4.6
準学士課程	4.8	資格証書取得	3.9
修士課程	4.8	その他	3.6
		博士課程	2.3
		学士課程	1.6
		準学士課程	0.7
合計(%)	100.0		100.0
実数	21		305

表2－11:学位取得後の専攻分野

学士取得者	%
経営	17.1
教育	15.8
健康	11.4
公共政策	8.2
法律	5.1
コンピューター	4.4
心理学	3.8

表2－12:学位取得時の専攻分野

学士取得者	%
経営	26.8
行動科学	16.9
健康	14.9
社会科学	14.5
人文科学	10.1
応用科学	7.3
応用学芸	4
自然科学・数学	3.7
コンピューター	1.8

(c) 雇用（転・就職）

アンケート調査の最後のパートでは，卒業生にCOSCで学位を取得した結果，現在の雇用，職場での地位，現在の地位への確保などの点で，どの程度のよい影響があったかを尋ねており，さらに，該当者にはなぜ専攻分野に関係する職につかないのか，その理由も尋ねている。

まず，卒業生のうち就職しているのは9割を越え（567人），そのうち8割（453人）がフルタイムの仕事に就いている（表2－13，参照）。また表にはまとめていないが，そのうちの34％が学位を得た結果として良い変化があったと報告しているが，うち13％が昇進，16％が昇級，11％が専攻に関連した職を得ることができ，6％が無職から雇用されたとのことである。また卒業生の75％が，学位の取得は現在のポストに就くために十分または大変十分有効であったと回答しており，現在無職または専攻と関係のない職についている学士卒業生に関しては，81％が自分の専攻に関係する職を探そうとしなかったためと回答しており，19％が探そうとしたが探せなかったと答えているとのことである。

表2－13:卒業生の就業形態	
フルタイム	72.6
パートタイム	18.3
無職	9.1
合計(%)	100.0
実数	624

3. COSC中退者に関するアンケート調査

(1) 調査の概要

さて，次に，COSCに入学したものの学位を取得せずに中退した学生の調査の紹介に移ろう。以下の調査結果は，1996年に実施されたCOSCの卒業生に関する調査，“ Charter Oak State College: Report on Withdrawing Students, June 1991 through January 1995 ”の分析結果であるが，対象者は，同大を1991年春から1995年初頭までに中退した合計811名であり，郵送留め置き法によって，271名から回答が得られている（回収率33.4 %）。

この中退者に関する研究の目的の主眼は，彼らのCOSCへの入学理由，同大の学位プログラムと教育サービスに対する満足度，中退の理由と将来の教育計画に関する情報の収集であるが，同時にCOSCの教育評価（Institutional Assessment Plan）の一つとしても位置づけられている。

調査分析は，2つのパートにわかれており，まず，学生個人の「教育的な経験」と，「中退の理由」および「その後の計画」についてである。なおここで言う「中退」とは，同大に入学費と登録料を払い込み1年以上在学した上で，2年目以降に継続して登録料を支払わなかった者を指している[2]。

まず，中退者の社会的属性であるが（表3－1～3－8，参照），性別としては過半数が女性であり，既婚者が6割以上を占めている。エスニシティーとしてはほとんどが白人である。これらの属性は，上述の卒業生のプロフィールと大きく変わりはない。また，年齢構成としても，20歳代が少ないものの40歳代が3分の1を占めるなど，卒業生と同じ傾向である。また，在学年数をみてみると，1年以上2年未満のものが7割近く，2年以上3年未満が2割強という内訳になっており，2年目での中退が多数を占めていることがわかる。

表3－1:性別	
男性	46.8
女性	53.2
合計(%)	100.0
実数	269

表3－2:結婚	
独身	38.5
既婚	61.5
合計(%)	100.0
実数	257

表3－3:エスニシティー	
黒人	8.3
アメリカ原住民	1.7
白人	90
合計(%)	100.0
実数	60

表3－4:年齢構成	
25-29	10.8
30-34	16.9
35-39	18.5
40-49	35.4
50-59	16.9
60歳以上	1.5
合計(%)	100
実数	65

表3－5：居住地区	
コネチカット州内	82
州外	18
合計(%)	100.0
実数	61

表3－6：中退したプログラム	
準学士	29.3
学士	70.7
合計(%)	100.0
実数	270

表3－7：在学期間	
1～2年	67.8
2～3年	21.7
3～4年	4.3
4～5年	2.3
5年以上	3.9
合計(%)	100.0
実数	258

表3－8：就業形態	
フルタイム	74.3
パートタイム	14.9
無職	10.8
合計(%)	100.0
実数	269

(2) 調査分析結果

(a)「教育的な経験」

まず，入学理由についてみたものが，表3－9である。これは，COSCへの入学に関して最も重要な理由を示したものだが，過半数のものが「すでに取得した単位の大部分が認められるため」(「既習単位の認定」) をあげ，つぎに「コストが安いため」(「コスト」)，「早く学位を取得できる機会の可能性があるため」(「短期間の学位取得可能」) と続いており，前章の「卒業生(学位取得者)」の調査結果とも同様の傾向となっている。

また，COSCの在籍中での学習経験のインパクトについても尋ねているが（表3－10，参照)，回答者の約半分が肯定的な意見を返してきており，具体的には59％のものが「学位取得」をあげており（これは，準学士を得てから，その後学士後を得るまでに退学した学生のことであると思われる)，「個人学習」と「自己への自信」の向上が，それぞれ32％とつづいている。また，2割のものが，「現職に対するスキルアップ」に役立ったとし，また13-17％のものが「ライティングスキル」，「時間管理」のスキル向上に，あるいは「新たなキャリアの準備」あるいは「上級学位への準備」，あるいは「地位や給料アップのために必要なスキル」を得ることに役立ったと答えている。その一方で，回答が10％を切るほどに役立っていないのは，「芸術への造詣」，「数学・科学原理の理解」，「問題解決」や「リーダーシップ」のスキル，「図書館の効率利用」などであった。これらの項目は，「卒業生調査」とは質問形式が異なり単純な比較はできないが，学習経験のインパクトは卒業生，中退者ともに同じ傾向を示しており，中退者は目的の学位は取得できなかったにしても，卒業生と同様に「個人学習」や「自己への自信」が向上したと答えた者が多いのは，興味深い。

次に，中退者調査では卒業生調査と同様に，在学中のCOSCの様々なファクターについてその「満足度」を尋ねているが（表3－11，参照)，「入学要件」と「成績証明書の照会」のサービスに関しては，ほとんどのものが満足（「非常に満足」「まあ満足」）している。また，「コスト」，「一般教育の単位履修要件」，「専攻分野の単位履修要件」，「単位履修方法」，「既習単位の認定数とレベル」などの面でも，大多数のもの（8割程度）は満足していることがわかる。逆に，

満足度が低いのは「大学のロケーション」,「アカデミック・アドバイス」,「学生組合活動」などであり，およそ3分の1が不満を抱いていることがわかる。特に,「奨学金」の側面では半数以上が不満足であると答えている。

この満足度に関しては，性別，結婚，就業形態別，などの前述の属性によってそれぞれの項目に関して統計的な有意差を検証しているが，それによれば，サブグループ間で有意な差異はあまり認められないが，認められた項目としては，女性のほうが男性よりも「新たなキャリアの準備」にインパクトがあったこと，独身の方が既婚者よりも,「コスト」面で有利という理由で入学を選択していること，無業層の方が有職者よりもインパクトとして「新たなキャリアの準備」をあげていること，奨学金を受けているものの方が「コスト」の面で入学した傾向が高いこと，また在学期間が2年以上の中退者の方が1年以上2年未満の中退者よりも,「専攻の単位履修要件」,「アカデミック・アドバイス」,「奨学金」の点で，満足度が高いこと，などが判明しているとのことである。

表3－9:入学の最も重要な理由

既修単位の認定	51.2
コスト	17.3
短期間の学位取得可能	11.5
単位履修方法の多様性	8.1
専攻分野の多様性	3.1
入学要件	2.7
高校の恩師の推薦	2.7
その他	1.9
友人・家族の推薦	1.2
雇用主の推薦	0.4
合計(%)	100.0
実数	260

表3－10:学位取得までのインパクト(多重回答)

学位取得	59.1
個人学習	31.8
自己への自信	31.8
現職に対するスキルアップ	19.7
試験受験	17.4
ライティングスキルの向上	15.9
時間管理	15.9
地位・給料アップのスキル	15.2
新たなキャリアの準備	12.9
上級学位への準備	12.9
芸術への造詣	6.8
読解力	6.8
問題解決	6.1
数学・科学原理の理解	5.3
図書館の効率利用	4.5
リーダーシップ	4.5
責任ある市民	2.3
回答者数	132

表3－11:学位取得の満足度	コスト	奨学金	入学要件	一般教育の単位履修要件	専攻分野の単位履修要件	単位履修方法	アカデミック・アドバイス	既習単位の認定数とレベル	テスト業務	成績認定の水準	成績証明書の照会事務	優等成績の水準	大学のロケーション	学生組合活動
非常に満足	36	21.4	50.2	37	35	51.7	43.1	48.1	37.7	31.7	38.8	27	22	16
まあ満足	39.3	26.8	43.4	50.2	50	30.9	23.8	29.1	47.4	55.9	51.1	61.5	38.7	54
あまり満足でない	16.1	10.7	5.1	9.5	10.5	10.6	15.9	11.8	10.5	10.2	8.4	11.5	23.1	24
不満足	8.7	41.1	1.3	3.3	4.5	6.8	17.2	11	4.4	2.2	1.7	0	16.1	6
合計(%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
実数	242	56	235	211	220	236	239	237	114	186	178	122	186	50

(b) 中退理由とその後の計画

アンケート調査の第2のパートでは，まず「中退の理由」について尋ねているが（多重回答),4割以上の者が「経済的理由」を挙げており，1/3の者が「家庭の事情」，また2割弱が「仕事の都合」が，それに続いている（表3－12，参照)。なお，表には図示していないが，調査項目には，中退への決断を下した際の重要なファクターとして，回答者の17%が個人のカウンセリング・サービスが重要な要因であったことをあげ，そして15%が教授陣とのより多くの接触が欲しかったと答えているとのことである。

次に，「中退後の将来計画」について尋ねている。表には示していないが，回答者の7割が今後も学習を継続しようとしているが，27％は未定，また3％がそうした計画はないと答えている。また，36％がCOSCに再入学する計画を持っているが，18％はその計画はなく，44％は未定となっている。また，今後も学習を続けるつもりの者のうち，45％はCOSCを含む学外学位プログラムを選ぶとし，34%が公立4年制大学，11％が私立4年制大学，6％が公立2年制機関に，それぞれ進学する計画と答えている。

また，以上の「中退」と「その後の計画」それぞれの項目に関して，性別，既婚・未婚別，就業形態別，などでの統計的な有意差を求めているが，それによればサブグループ間で有意な差異はあまり認められないが，認められた項目としては，女性のほうが男性よりも「不明確な目的」によって中退しやすいこと，既婚者の方が独身者よりも「家庭の事情」によって，また独身者の方が既婚者よりも「健康上の問題」によって中退しやすいこと，また2年以上在学したグループの方が2年未満のグループよりも，「経済的理由」によって中退しやすく，また中退後も再びCOSCへの再入学を望む割合が高いが，その一方で2年未満の在学者は，個人的なカウンセリングの必要性を上げる率が高いこと，などといった結果が得られている，とのことである。

表3－12: 中退の理由（多重回答）

経済的理由	41.9
家庭の事情	33.9
仕事の都合	19.9
個人的な目標変更	16.9
不明確な目的	15.3
サービスに対する不満	12.7
単位履修の困難	10.6
健康上の問題	9.3
成績に対する不満	8.9
専攻要件に対する不満	8.5
その他	7.2
専攻の単位履修要件不足	6.8
学業目的の達成	6.4
希望専攻に登録できず	6.4
伝統的大学への転学希望	4.2
最初に選択した大学への入学	2.1
転職（学位が不必要に）	1.7
仕事上学位が不必要になった	1.3
実数	236

4. おわりに

以上，近年のCOSCの卒業生と中退者に関する調査と，それぞれの分析結果を紹介してきたが，これらのデータから，COSCの学位プログラムが学生個人にとって，学業面及び職業的な目標達成のための重要な手段と位置づけられていることがわかる。また同時に，以上の結果には，さらに再考されなければならない項目があることも示唆されている。これまでのデータ分

析の結果を整理しつつ，その問題点などを指摘しておきたい。

まず，卒業生調査の結果によれば，学生の入学理由としてはこれまでに取得した単位を失う可能性が低いこと，学位取得に要する時間が伝統的な学位プログラムに入学するよりも短いこと，単位取得方法が多様であること，などのためであることが明らかとなっているが，COSCが四半世紀にわたって卒業生を不断に輩出してきたのは，このような理由によるものであり，今後ますます同大の地位と役割は重要視されていくことになるだろう。

次に，卒業生のほとんどは，COSCの方針とサービスに満足していることがわかる。これは，目標通りに学位を取得できた卒業生を対象としていることが大きな要因であろうが，ここ数年授業料が値上げされているにもかかわらず，「コスト」に対する満足度も高いことを考え合わせると，同大が学位取得の代替的なルートとして高い評価を得ていることは間違いないだろう。

また，準学士及び学士の学位取得によって，卒業生は個人的な目標を達成しており，その際に一番インパクトが高かったものとして，調査では，「学位取得」があげられている。これは，先にも触れたとおり，ある意味で当然のことといえるが，他にライティングスキルや読解力に対するインパクトがあげられていることは興味深い。また，COSCの専門科目の履修要件が，学士卒業生に，職業ライセンスや資格試験，専攻分野での上級学位への準備を提供しているようである。

さらに，COSCの卒業生は就職先で良好な変化があったと報告しているが，この結果は以前の調査結果と比べればその割合は減少したとのことであるが，これはCOSCの学位の価値が下がったと言うよりもコネチカット州の不安定な経済の反映の結果とも考えられよう。それを検証するために企業調査などを今後進めていく必要があるだろう。

次に，中退者についての調査結果によれば，中退者といえども卒業生と同様に，同大の学位プログラムや教育方針，サービスには全体的に満足しており，中退せざるを得ないのは，同大が影響を与えることができないような「経済的理由」，「家庭の事情」および「仕事の都合」といった3つの理由によるものなのである。ただし，アカデミック・アドバイスについては，あまり満足していない者が多いことも確かである。特に，入学２年未満で中退した者は個人のカウンセリングが退学決定の寄与要因として重要だったとしており，これとは対照的に，入学から２年以上の者はアカデミック・アドバイスには入学まもない学生よりも満足しており，また経済的理由で退学するにしても再入学を希望する傾向が高いことが明らかとなっている。すなわち，入学の2年目あたりが，中退か否かのクリティカルな時期であり，アカデミック・アドバイスは，入学から1年間が重要であることが示唆されているのである。この調査結果を受けて，COSCは近年，アカデミック・アドバイスのサービスを再編成し，入学を希望する者のための入学相談と入学した学生への相談に大別してよりきめ細やかなサービスを提供することとしたとのことで，今後，同大の在学者の歩留まりはさらに向上することになるであろう。また性別でみると，女性は男性よりも新しいキャリアのための準備のために入学し，アカデミックな目標に関して優柔不断であるために退学する傾向が高いことなどが明らかとされており，その意味では，女性によりアドバイスを手厚くするなどの方策が採られるべきだともいえる。

こうしたCOSCの機関調査から垣間見えてくるのは，同大の学外学位授与機関としての成功とそれに向けた不断の努力であり，また社会人学生を主体とした生涯学習体制への高等教育機関の高い感応性である。ひるがえって，こうしたアメリカの学外学位授与機関と同様の機能を有するわが国の学位授与機構のあり方を考え合わせるならば，本稿で考察してきたようなCOSCが持つ特長と問題点を参考に，わが国の今後の学位授与のシステムの改善・改革の方向性を探索していく必要があろう。

注）

1　拙稿「アメリカにおける学外学位授与機関―チャーターオーク州立大学の制度と仕組み―」『学位研究』第9号，75－92頁，1998，および，拙稿「アメリカにおける学外学位授与機関（2）―チャーターオーク州立大学コネチカット州高等教育システム―」第10号，1999，参照。

2　The Charter Oak State College, *1998-2000 Official Cataloge,* pp.24-25. 1998.

［ABSTRACT］

External Academic Degree Program in the United States (III): Graduates and Withdrawing Students of Charter Oak State College

Koichi HASHIMOTO*

The objective of this paper is to analyze graduates and withdrawing students' profiles and their experiences on the external academic degree program, by utilizing the surveys conducted by Charter Oak State College *(Report on Recent Graduates, Fall 1991 through Spring 1995 and Report on Withdrawing Students, June 1991 through January 1995).* Charter Oak State College (hereinafter called COSC) is one of external academic degree programs in the United States and conducted surveys by questionnaires to COSC alumni (degree earners) and withdrawing students.

Like Regent College and Thomas Edison State College, COSC is an external degree program of Connecticut State of the United States, which does not require students to academic residency, that is, it does not have an educational function on its campus, but provides degrees (Associate, and Bachelor degrees) solely based on the evaluation of external study. In this sense, this college has many aspects which are similar to that of NIAD in Japan.

The outline of the external degree program of COSC and its status and role in the Connecticut State higher education system has already been analyzed in the previous paper. In this paper, I introduce the highlights of the outcomes of the questionnaire surveys conducted by COSC to alumni (Bachelor and Associate degree earners) and withdrawing students. The highlights are, for example, the reasons of enrollment, impact by earning degrees, reasons of withdrawing, and examine its challenges and future prospects by compared with NIAD.

First, I introduce the outline and results of the survey, (1) to alumni of COSC (Chapter 2), and, (2) to withdrawing students of COSC (Chapter 3), then look into the problems and future prospects of COSC (Conclusion).

* Associate Professor, National Institution for Academic Degrees